

第3章 京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査

伊藤淳史 富井 眞

1 調査の経緯

調査地点は京都大学北部構内に広がるが（図版1-450）、いずれの地点も北白川追分町遺跡に含まれる（図24）。この北部構内に、広く基幹・環境整備工事が計画され、ガス等の埋管により掘削をとまなう工事が実施されることになった。そのため、遺構や遺物の発見に備えるとともに、各時代の地層の堆積状況を記録するべく、掘削の機会に随時立ち会った。調査期間は、2016年12月1日～2017年4月18日で、回収した遺物は整理箱1箱分である。埋管工事は第1～8工区におよぶが、このうち新たな知見がえられた第4・5・7・8工区について報告する（図25）。また、第5工区で確認できた古墳時代～古代の遺構は、1973年度に実施された発掘調査（9地点）での成果と関連する可能性があるが、当時の発掘調査については十分に報告できていないため、今後の活用を図るために第3節において出土遺物を中心に図示することとした。

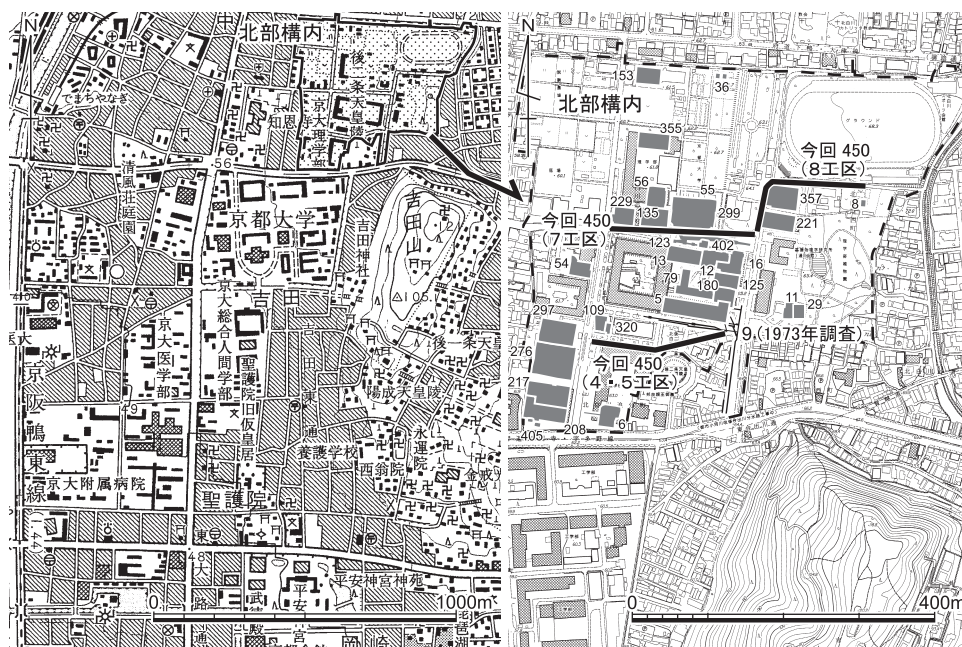


図24 調査地点の位置 縮尺：左1/25000, 右1/10000

2 調査の成果

(1) 層位と遺構 (図版4, 図26~30, 表1・2)

北部構内をはじめ吉田キャンパスの京都大学構内遺跡の堆積は、弥生時代前期末中期初頭の土石流堆積である黄色粗砂の確認される地点の場合、その黄色砂の上位では、黒みの強い古代、茶色みの強い中世、灰色みの強い近世、となるのがこれまでの発掘調査から導

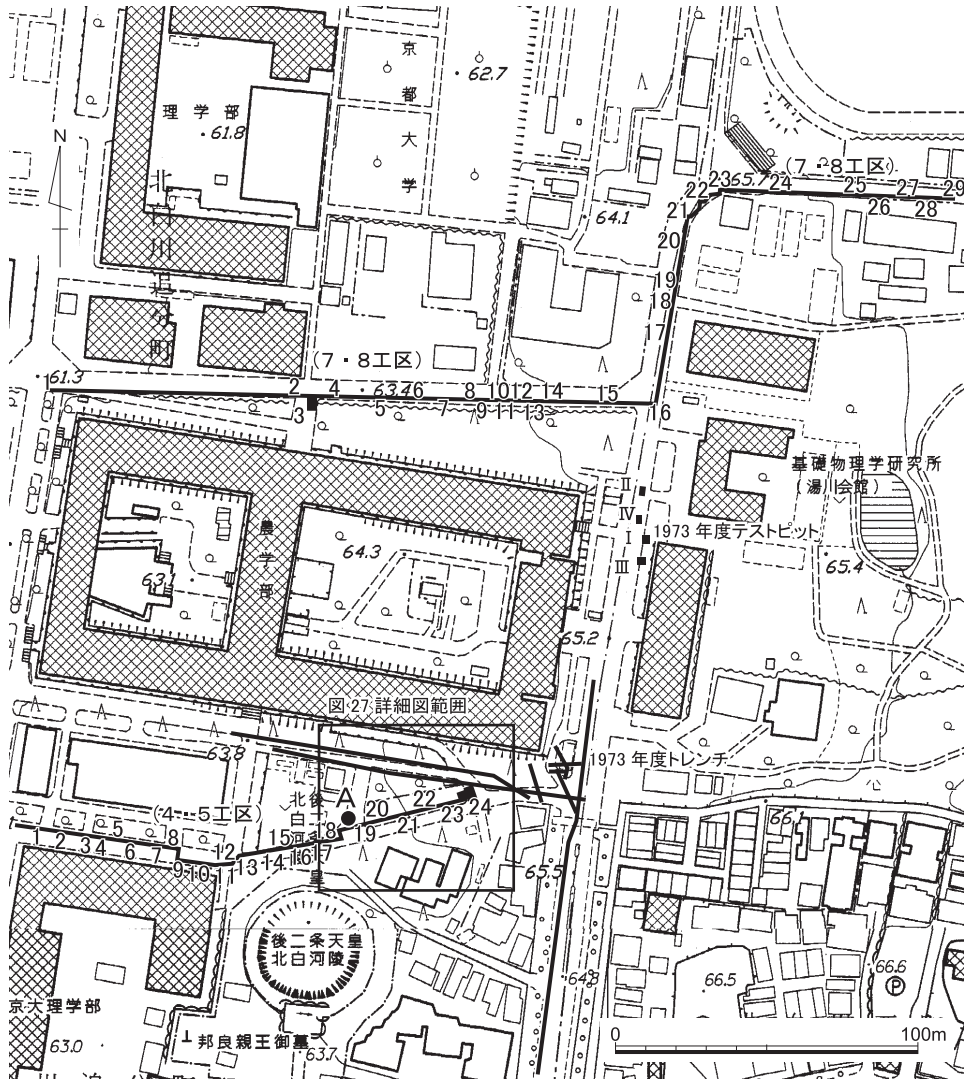


図25 調査区配置と層序・主要遺構の確認位置 縮尺1/2500

調査の成果

き出されている基本的なパターンである。立合調査では、包含遺物を確認できないときには、こうした基本層序をよりどころにして時期を推測することが通常である。今回の北部構内の立合調査においては、第4・5工区では黄色砂を確認できたが、第7・8工区では確認できなかった。

第4・5工区 現地表は西下りの緩斜面で標高は、1地点ではおよそ62mで24地点ではおよそ65mをはかる。この両工区の堆積は、上記の基本層序どおりと言える（表1、図26）。また、黄色砂の堆積が厚いことがわかり、いずれの地点でも、その下位の弥生前期初頭の旧地表面を確認できなかった。とりわけ、4地点と7地点では、層厚が1mを超えており、さらには、4地点と13地点では、掘削底面に粒径が300mmを優に超える巨礫が包含されていることを確認した。B D30区（図版1-109地点）・B C30区（図版1-320地点）・B D28区（図版1-297地点）の黄色粗砂中で確認された巨礫と一連のものとして推定できる。黄色砂の肉眼観察によれば、今回の立合調査では粒径の垂直変動に上方組粒化の傾向を指摘できず、粒径が1mmより小さい砂層は15地点の最上部で確認されたのみである。これらのことから、黄色砂に覆われて残存しているだろう弥生時代の旧地表面は、現在の掘削深度よりも数十cmは下位にあることが予測できる。なお、15地点の最上部の黄色細砂は、土石流の最後ないし終わりに近い段階の堆積であろう。

黄色砂の上部については、第4工区の西辺では近接するB D30区（図版1-109地点）・B C30区（図版1-320地点）の発掘調査で確認されているよりも高い標高で黄色砂の残存を確認できた。また、土壌化して漸次的に黒褐色土に移行している状況がうかがえるのは3・15～18地点だけで（図版4-1・2）、多くの地点の断面観察によれば、後世に直線的に削平されている。

第5工区A地点で、古墳の周溝の可能性のある黒褐色土の溝状の落ち込みS X 1を確認している（図版4-3～6、図27・28）。しかし、溝状のラインは管路に斜行しているので周溝だとしても幅が判然とせず、また掘削深度底面にまで達しているため深さも40cm以上ということしかわからない。埋土からは、4個体はあると思われる円筒埴輪の小片およそ100点を、検出面から20cmほど下がったあたりで回収できた。これらの埴輪は、こぶし大の角礫の集積のすぐ上で、破片どうしが比較的まとまった状態で出土している。掘削底面より下位にさらに埴輪が包含されている可能性は否定できないが、現状で確認できる限りは、礫の集積より下位からは埴輪は出土していない。

埴輪の下位に認められる角礫については、葦石が転落してきた可能性も否定はできない

京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査

表1 第4・5工区の立合調査一覧

工区	地点	調査日	概要
4区	1	20170112	GL-1.3mまで掘削。-0.4~-0.55m灰褐色土（近世）、以下は黄色砂。
4区	2	20170116	GL-1.0mまで掘削。-0.25~-0.3m灰褐色土（近世）、~-0.45m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。
4区	3	20170117	GL-0.9mまで掘削。-0.35~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.5m茶褐色土（中世）、~-0.7m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。黒褐色土から瓦破片。
4区	4	20170117	GL-2.15mまで掘削。-0.4~-0.45m灰褐色土（近世）、~-0.55m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。最下部に30cm大の花崗岩角礫あり。
4区	5	20170106	GL-1.3mまで掘削。-0.6~-0.65m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。
4区	6	20170118	GL-1.0mまで掘削。-0.45~-0.5m灰褐色土（近世）、~-0.6m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。茶褐色土下に掘削底面以深へ続く直径30~40cmの黒褐色土ピット2基。黄色砂は東では粒径1mm以下の黄色細砂。
4区	7	20170123	GL-2.2mまで掘削。-1.1m~黄色砂。
4区	8	20170123	GL-1.0mまで掘削。-0.4~-0.7m灰褐色土（近世）、~-0.8m茶褐色土（中世）、~-0.9m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。黄色砂上面は黒褐色土により削平。
4区	9	20170125	GL-1.1mまで掘削。-0.35~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.5m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。
4区	10	20170127	GL-1.1mまで掘削。-0.2~-0.35m灰褐色土（近世）、~-0.4m灰赤褐色土（近世）、~-0.5m灰褐色土（近世）、~-0.65mマンガング着層（中世か）、以下は黄色砂。
4区	11	20170130	GL-1.4mまで掘削。-0.55~-0.8m茶褐色土（中世）、~-0.95m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。
4区	12	20170124	GL-1.0mまで掘削。-0.5~-0.75m茶褐色土（中世）、~-0.95m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。黒褐色土は北へ落ちていく。
5区	13	20170131	GL-1.4mまで掘削。-0.9~黄色砂。最下部に30cm以上の花崗岩巨礫あり。
5区	14	20170131	GL-1.4mまで掘削。-0.25~-0.4m灰赤褐色土（近世）、-0.4~-0.6m灰褐色土（近世）、-0.6~-0.7m灰茶褐色土（近世か）、-0.7~-0.8m茶褐色土（中世）、-0.8~-1.15m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。
5区	15	20170131	GL-1.3mまで掘削。-0.4~-0.45m灰褐色土（近世）、~-0.6m灰茶褐色土（近世か）、~-0.75m茶褐色土（中世）、~-0.8mマンガング着層（中世か）、~-0.9m黒茶褐色土（古代）、~-1.1m黒褐色土（古代）、~-1.15m黒灰色粗砂質土（弥生か）、以下は黄色細砂。黒褐色土から形象埴輪。黄色細砂の下位に黄色粗砂が続く。
5区	16	20170201	GL-1.2mまで掘削。-0.7~-0.9m灰茶褐色土（近世か）、-0.9~-1.0m茶褐色土（中世）、-1.0~-1.1m黒褐色土（古代）、以下は黄色細砂。黒褐色土は東へ薄くなる。
5区	17	20170201	GL-1.1mまで掘削。-0.4~-0.5m灰褐色土（近世）、~-0.6m灰赤褐色土（近世）、~-0.9m灰茶褐色土（近世）、~-1.05m茶褐色土（中世）、~-1.1m黒褐色土（古代）、以下は黄色細砂。
5区	18	20170202	GL-1.15mまで掘削。-0.8~-0.9m灰茶褐色土（近世）、~-1.0m茶褐色土（中世）、~-1.05m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。茶褐色土の西への落ち込みあり。
5区	A	20170203	図30参照
5区	19	20170206	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、~-0.8m黒褐色土（古代）、以下は黄色粗砂。黒褐色土は西へ落ちていくSX1の埋土で、埴輪1点出土。
5区	20	20170206	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、~-0.8m黒褐色土（古代）、以下は黄色粗砂。土坑埋土は黒灰色砂質土。
5区	21	20170207	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、~-0.75m暗灰色土（古代）、以下は黄色粗砂。S D 2埋土は暗灰色土。
5区	22	20170208	GL-1.0mまで掘削。-0.45~-0.6m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、~-0.8m暗灰色土（古代）、以下は黄色粗砂。茶褐色土は東へ厚みを増す。S D 3埋土は暗灰色土。
5区	23	20170208	GL-1.0mまで掘削。-0.45~-0.6m灰褐色土（近世）、~-0.85m茶褐色土（中世）、以下は黄色粗砂。S X 2埋土は黒褐色土。
5区	24	20170210	GL-1.3mまで掘削。-0.4~-0.5m明灰褐色土（近世）、~-0.8m灰褐色土（近世）、~-0.9m灰茶褐色土（中世か）、以下は黄色砂。東落ちのS D 4は茶褐色埋土で暗茶褐色土に切られる。
5区	25	20170110	GL-1.1mまで掘削。四周攪乱
5区	26	20170110	GL-1.0mまで掘削。四周攪乱

調査の成果

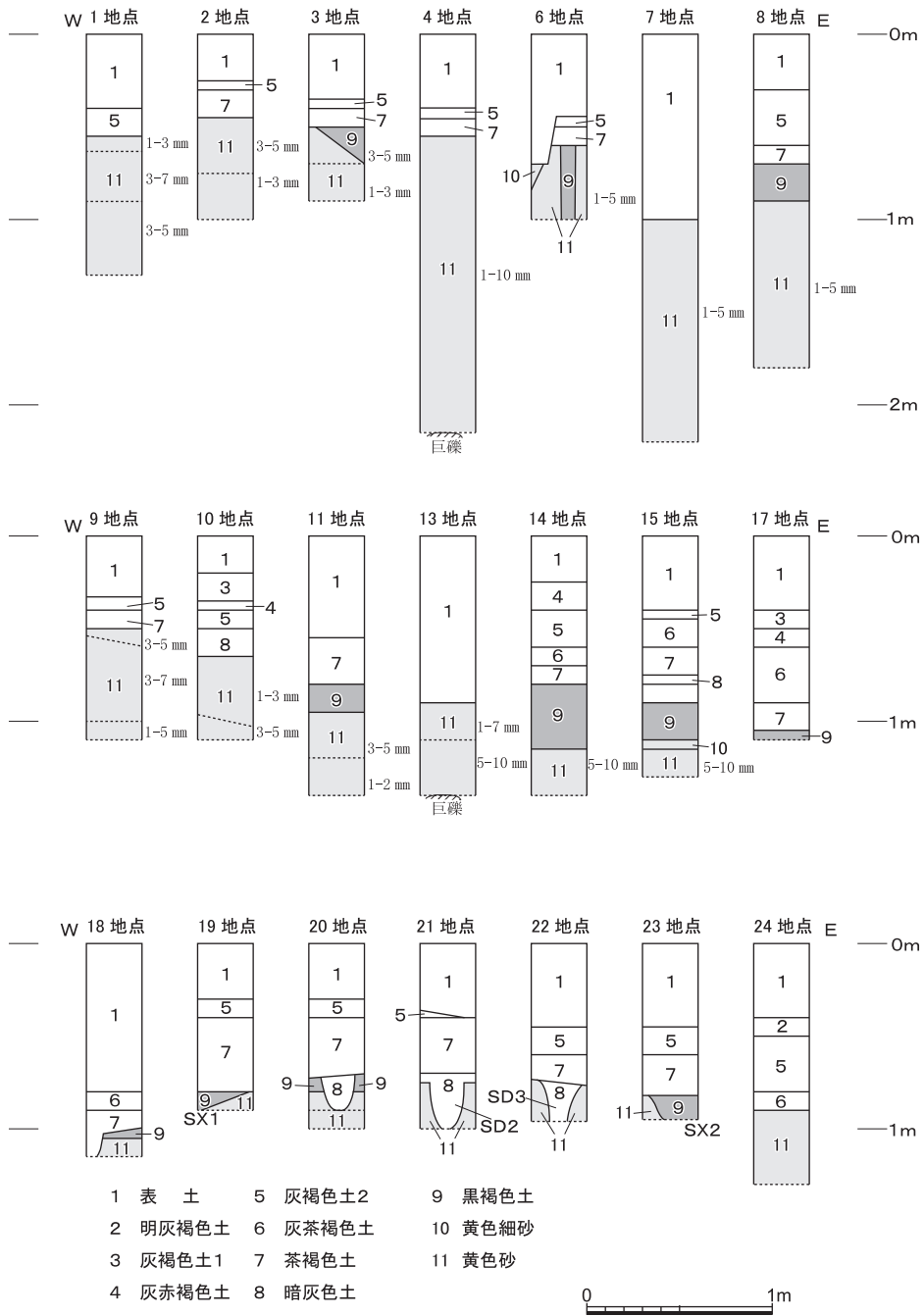


図26 第4・5工区の層序模式図 縮尺1/40

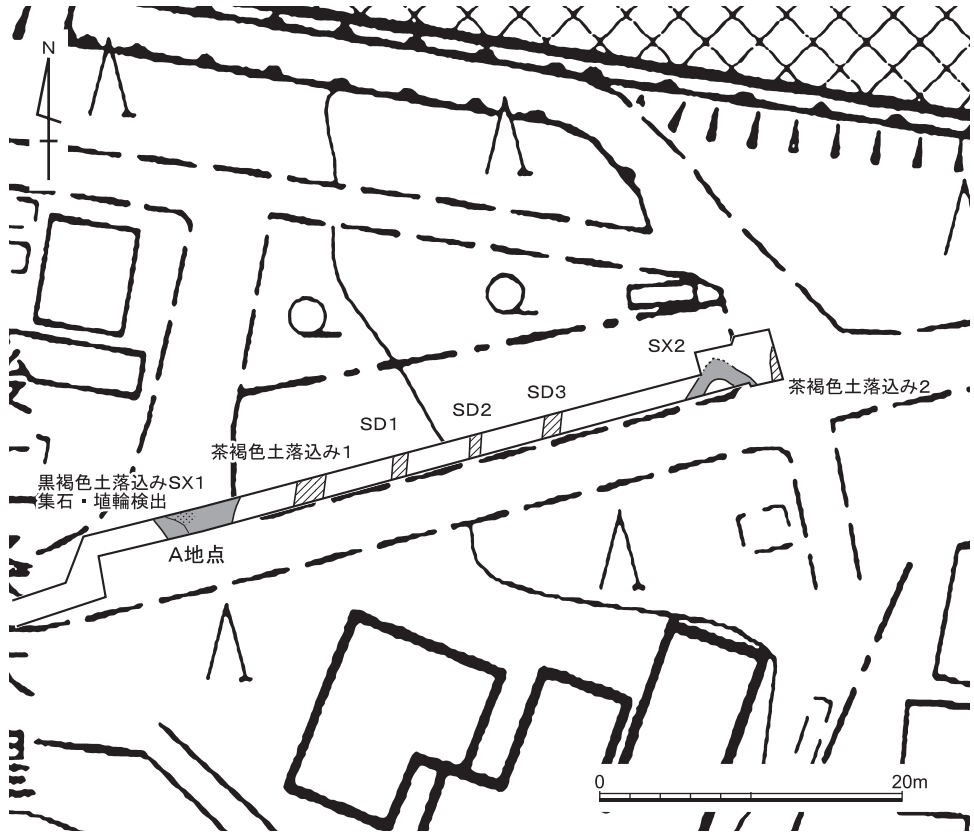


図27 第5工区の主要遺構配置図 縮尺1/500

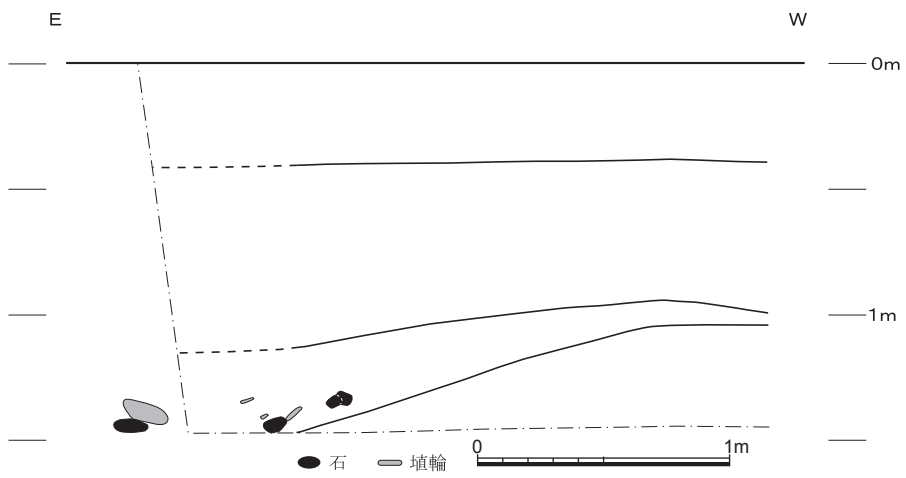


図28 第5工区A地点南壁のSX1の層序 縮尺1/30

調査の成果

が、個々の石は噛み合っていない。ただし、黒褐色土には礫が包含されることはまれであるとともに、構成礫種は白川流域によく見られる花崗岩ではないので、人為的にこの地点にもたらされたことは間違いなからう。S X 1では、埴輪以外には、北壁の立ち上がり付近、検出面から5cmほど下位で、須恵器甕の頸部破片を1点回収できた(II 16)。

埴輪は、S X 1以外ではS X 1の西約20mの15地点と西約10mの17地点の黒褐色土からも、それぞれ家形埴輪の隅柱部と思われる形象埴輪片1点と円筒埴輪1点を回収しているが(II 10・II 12)、そのほかの地点では見当たらなかった。

これより東側には、黄色砂上面で黒みがかかった砂質土を埋土とする南北方向の溝を数条確認できたほか(S D 1～3)、23地点では、直角に折れ曲がる溝(S X 2)を確認している。S X 2は、遺物の出土はないが、S X 1と同じく黒みの強い埋土であることから古墳の周溝の隅部の可能性も考えておきたい。

第7・8工区 近世の灰褐色土の下位では、中世の暗茶褐色土、古代の黒褐色土ないし黒灰色土、先史時代の暗褐色土、白色粗砂(自然堆積の花崗岩砂粒)という層序を基本としている(表2、図29・30)。第7工区は、西半は攪乱により有意な堆積状況を確認できなかったが、東半では攪乱を免れた地層がよく残っていた(図29)。古代の堆積と思われる黒みの強い土壌化層の堆積はなく、中世の暗茶褐色土から連続的に暗褐色土に移行しているため、両者の判別は容易ではないが、上部は中世の土師器細片を包含することがあるのに対して、下部に包含されている遺物は縄文土器のみであった。縄文時代中期末の堅穴住居や大型建物柱穴列が検出されたB F 33区(図版1-123地点)やB F 32区(図版1-299地点)の発掘調査区に近接する6・7地点では、暗褐色土から摩滅していない縄文中期～後期の破片を回収している。

暗褐色土の下部は、粗砂質で土壌化のあまり進んでいない暗灰色土から、花崗岩粒で構成される白色粗砂へと、漸次的に移行している。白色砂の粒径は、10mm前後の場合もあるがおおよそ1～7mm程度で、1mm以下の細かい部分もある。B F 32区の調査成果に照らせば、白川系流路の水成堆積と思われる。また、3地点では、白色粗砂の下位にやや土壌化した明茶褐色粘質土の堆積を確認した。遺物は発見できなかったが、B F 32区(図版1-299地点・402地点)で確認された縄文早期以前の土壌化層に対応すると判断できる。

第8工区は、25地点以東では灰色がかかった黒色の土壌化層が厚く堆積している(図30)。そこから数点の古代の土師器や瓦を回収したが、今回の立合調査の掘削深度までには、縄文土器を確認できていない。しかし、28地点では、近接するB G 34区(図版1-357地点)

京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査

表2 第7・8工区の立合調査一覧

工区	地点	調査日	概要
7区	1	20170110	GL-1.0mまで掘削。四周攪乱
7区	2	20170123	GL-1.1mまで掘削。四周攪乱
7区	3	20170124	GL-1.9mまで掘削。-0.8~-1.0m暗茶褐色土(中世), ~-1.2m暗褐色土(縄文), ~-1.9m白色粗砂(縄文), 以下は明茶褐色土。白色粗砂は粒径3~5mmだが上部はさらに細かい。
7区	4	20170127	GL-1.1mまで掘削。-0.2~-1.05m砂取り穴埋土(中世), ~-1.1m暗褐色土(縄文か), 以下は暗灰褐色粗砂質土(白色粗砂がやや土壌化した地層)。
7区	5	20170126	GL-0.9mまで掘削。-0.25~-0.35m灰褐色土(近世), ~-0.45m茶褐色土(中世), ~-0.6m暗褐色土(縄文か), ~-0.8m暗灰色粗砂質土, 以下は白色粗砂(粒径1~7mm)。茶褐色土は西側へ落ち込んで下部に砂取り穴埋土を認める。
7区	6	20170125	GL-0.9mまで掘削。-0.35~-0.5m暗茶褐色土(中世), ~-0.6m暗褐色土(縄文か), ~-0.7m暗灰色粗砂質土, 以下は白色粗砂(粒径1~7mm)。暗褐色土から縄文土器片。白色粗砂に達する直径30cmの暗褐色土ピット1基。
7区	7	20170131	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.35m灰褐色土(近世), ~-0.5m暗茶褐色土(中世), ~-0.7m暗褐色土(縄文か), ~-0.8m暗灰色粗砂質土, 以下は白色粗砂(粒径1~5mm)。暗褐色土から縄文土器片。
7区	8	20170130	GL-1.2mまで掘削。-0.2~-0.3m灰褐色土(近世), ~-0.4m暗茶褐色土(中世), ~-0.6m暗褐色土(縄文か), ~-0.8m暗灰色粗砂質土, ~-1.1m白色粗砂(粒径1~7mm), 以下は白色細砂。
7区	9	20170130	GL-1.1mまで掘削。-0.25~-0.4m灰褐色土(近世), ~-0.8m暗茶褐色土(中世), ~-0.9m暗褐色土(縄文か), 以下は白色粗砂(粒径1~5mm)。
7区	10	20170130	GL-1.1mまで掘削。-0.25~-0.4m灰褐色土(近世), ~-0.5m暗茶褐色土(中世), ~-0.7m暗褐色土(縄文か), 以下は白色粗砂(粒径5~10mm)。
7区	11	20170131	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.35m灰褐色土(近世), ~-0.5m暗茶褐色土(中世), ~-0.7m暗褐色土(縄文か), ~-0.8m暗灰色粗砂質土, 以下は白色粗砂(粒径1~2mm)。
7区	12	20170131	GL-0.9mまで掘削。-0.3~-0.45m暗茶褐色土(中世), ~-0.65m暗褐色土(縄文か), ~-0.8m暗灰色粗砂質土, 以下は白色細砂。
7区	13	20170201	GL-0.9mまで掘削。-0.25~-0.3m灰褐色土(近世), ~-0.5m暗茶褐色土(中世), ~-0.7m暗褐色土(縄文か), ~-0.8m暗灰色粗砂質土, 以下は灰白色粗砂(粒径3~5mm)。灰褐色土は東へ落ち込む。暗茶褐色土の土坑あり。
7区	14	20170201	GL-1.15mまで掘削。-0.25~-0.45m灰褐色土(近世), ~-0.75m暗茶褐色土(中世), ~-1.05m暗褐色土(縄文か), ~-1.1m暗灰色粗砂質土, 以下は白色細砂。
7区	15	20170202	GL-0.9mまで掘削。-0.3~-0.6m灰褐色土(近世), ~-0.8m暗茶褐色土(中世か), 以下は砂取り穴埋土(中世)。
8区	16	20171201	GL-0.9mまで掘削。四周攪乱
8区	17	20171206	GL-0.9mまで掘削。四周攪乱
8区	18	20171207	GL-1.2mまで掘削。-0.8m~黒灰色土(古代か)
8区	19	20171208	GL-0.9mまで掘削。-0.6m~黒灰色土(古代か)
8区	20	20171209	GL-0.9mまで掘削。-0.6m~砂取り穴埋土(中世か)
8区	21	20171212	GL-0.9mまで掘削。-0.4~-0.6m灰褐色土(近世), ~-0.65m黄灰褐色砂質土(中世か), ~-0.8m暗茶褐色土(中世), 以下は茶褐色土(中世)。
8区	22	20171215	GL-1.0mまで掘削。-0.8m~暗茶褐色土(中世)
8区	23	20171216	GL-0.85mまで掘削。-0.55~-0.6m灰褐色土(近世), 以下は暗茶褐色土(中世)。
8区	24	20171219	GL-0.7mまで掘削。-0.45~-0.65m灰褐色土(近世), ~-0.7m赤褐色土(近世), 以下は灰褐色土(近世)。
8区	25	20171220	GL-0.9mまで掘削。-0.4~-0.7m暗茶褐色土(近世), 以下は黒灰色土(古代)。黒灰色土から古代土師器・瓦破片。
8区	26	20171221	GL-0.9mまで掘削。-0.4~-0.5m灰褐色土(近世), ~-0.7m暗茶褐色土(中世), 以下は黒灰色土(古代)。
8区	27	20171222	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.7m暗茶褐色土(中世), 以下は黒灰色土(古代)。西側で灰褐色土埋土の近世野壺の底部を確認。
8区	28	20171222	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.7m灰褐色土(近世), 以下は砂取り穴埋土。
8区	29	20170213	GL-1.5mまで掘削。-0.4~-0.6m赤褐色土(近世), ~-0.8m黄灰褐色砂質土(中世か), ~-1.0m黒灰色土(古代), ~-1.2m暗灰色粗砂質土(古代), 以下は黒色粘質土(縄文か)。暗灰色砂質土から古代土師器・瓦破片。

調査の成果

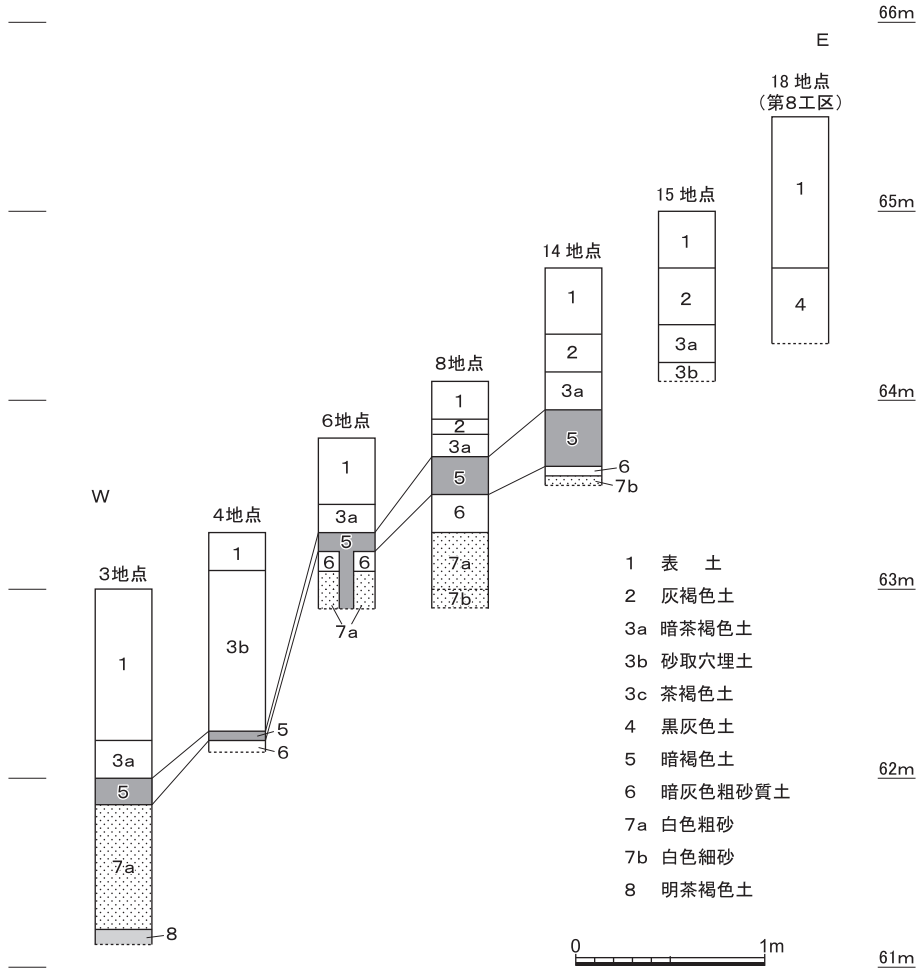


図29 第7工区の層序模式図 縮尺1/40

と同様に砂取り穴の埋土が堆積しているので、今回確認した黒灰色土も、BG34区の堆積状況と同じく縄文時代から古代にかけて白色粗砂の上部に形成された土壌化層と推定できる。なお、16地点で確認した黒灰色土は25地点以東の黒灰色土に対応すると思われるが、しまりがよくない。

(2) 遺物 (図版5・6, 図31~33)

II 1~II 12は第4工区出土の埴輪片で、II 10を17地点、II 12を15地点で回収したほかは、いずれもA地点の落込みSX 1出土。II 1~II 10は円筒埴輪で、II 12は形象埴輪である。II 1~II 4は、いずれも灰白色を呈し、色調・焼成・調整工具から、同一個体と判断する。

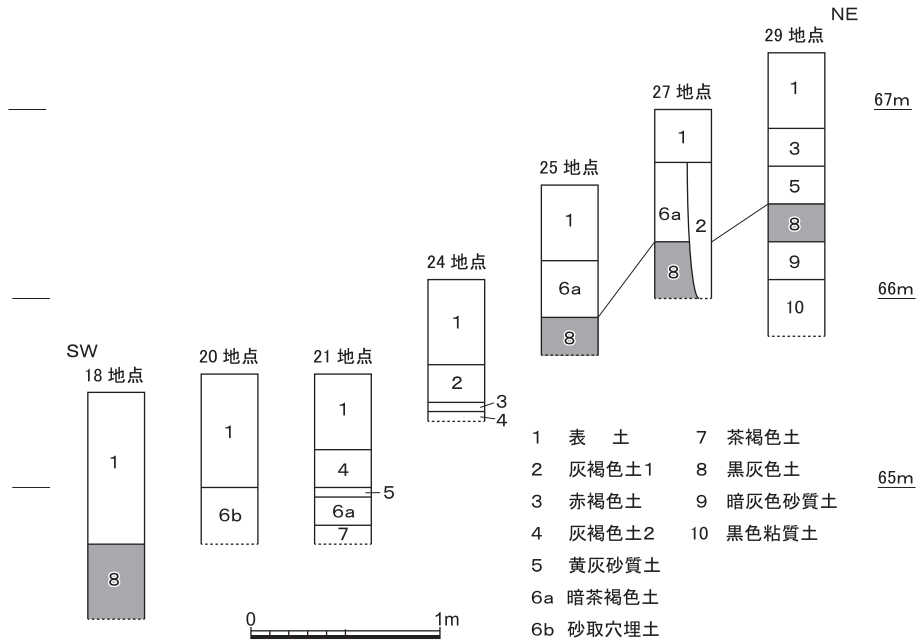


図30 第8工区の層序模式図 縮尺1/40

II 1 は口縁部で、破片の下端付近の外側ではヨコハケをタテハケが切っていることが確認できる。口縁端部は、内外面のタテハケの後に面取りをほどこし、そのヨコナデは内外面とも10mm前後までおよぶ。II 2 は、口縁下の1条目の突帯をもつ破片で、突帯断面はシャープな三角形を呈する。調整は、外面はヨコハケの後にタテハケで、内面は外面の突帯付近より上位にはタテハケ。II 3 は透かし口を有するので、突帯は、2条目ないしそれ以下のものである。外面にはタテハケは認められない。II 4 の底部では、外面には、A N 21 区の吉田二本松古墳群 8 号墳出土の円筒埴輪のようなオサエないしタタキ目は認められず、ハケメの静止痕跡が明瞭に残る。B d 種ヨコハケ〔一瀬1998〕に相当し得よう。

II 5 は、白橙色を呈する円筒埴輪の口縁端部破片で、外面には1条の線刻が縦走する。調整は、外面はヨコハケで内面はタテハケ。端部の面取り調整は内外面のハケメにはほとんどかぶらない。胎土には粒径10mmほどの堆積岩が含まれる。II 6 ~ II 9 は円筒埴輪で、淡橙色を呈し器面が摩滅している。同一個体と思われる。II 6・II 7 は口縁部で、II 6 は、B c 種ヨコハケと思われる直線的な静止痕の残るヨコハケで、内面では斜めのハケメを端部付近のヨコハケが切る。口縁端部の面取りは、内外面のハケメにかぶるが、外面では10mm前後までおよび、いくぶん内湾気味にほどこされる。II 7・II 8 も同様の特徴を残すが、

調査の成果

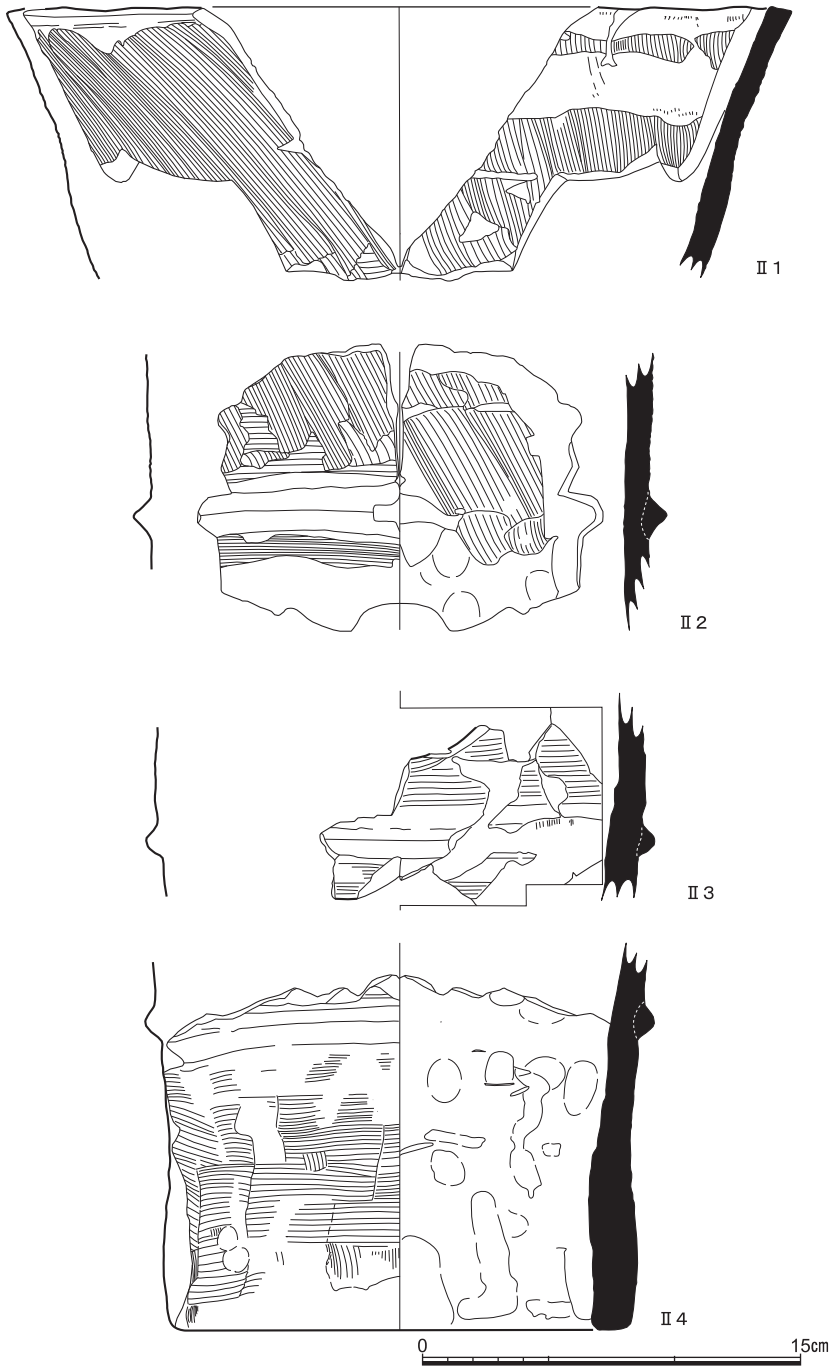


図31 第5工区の出土遺物(1) 縮尺1/3

京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査

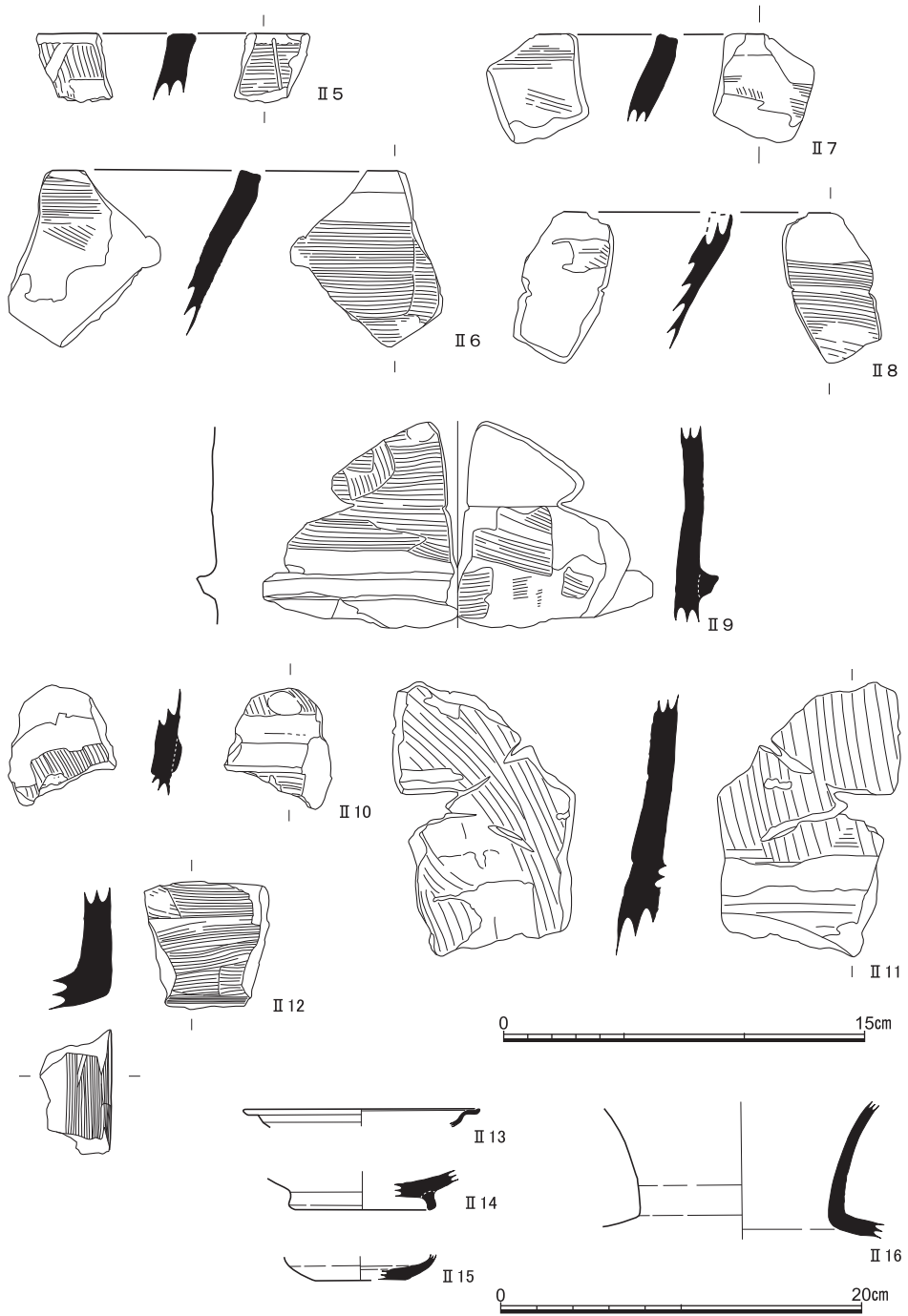


図32 第5工区の出土遺物(2) II 5 ~ II 12縮尺1/3

調査の成果

摩滅がより進行し、Ⅱ 8ではさらに内面が広く剝離している。Ⅱ 9は、突帯断面が稜の比較的明瞭な台形を呈する。外面には部分的にタテハケが認められ、摩滅の進行した内面でも突帯の裏側あたりには斜めのハケメを認めえる。

Ⅱ 10は、黄橙色を呈し、低い台形の断面を呈する突帯をもつ。突帯の上方にはタテハケを確認でき、内面にもタテハケを確認できることから、1段目の突帯と思われる。茶褐色を呈するⅡ 11は、外面は突帯が剝離したと思われ、突帯部の上方はタテハケで下方はヨコハケの調整となり、内面はタテハケである。この破片は、ハケメの特徴はほかの個体とは異なり、粗雑な印象を与える。形象埴輪の目立たない部位の可能性もあるが、よくわからない。Ⅱ 12の形象埴輪は、家形埴輪の隅柱部と思われる。シャープに折れ曲がる外面の調整は、鉛直方向にハケメがほどこされている。ハケメはほかの円筒埴輪よりも細かい。

こうした埴輪の特徴は、吉田二本松古墳群 8号墳の埴輪の特徴と比べると、型式学的には古いと言える。円筒埴輪で言えば、Ⅳ期〔川西1978〕におさまると思われる。

Ⅱ 13・Ⅱ 14は S D 1 周辺で回収した。Ⅱ 13は平安時代の土師器で、「て」字状の口縁断面を呈し器壁の薄い B₂ 類の皿である。Ⅱ 14は平安時代の白色土器。Ⅱ 15は15地点で回収した須恵器坏の底部。Ⅱ 16は S X 1 の西の立ち上がり付近で回収した古墳時代の須恵器甕の頸部。

Ⅱ 17～Ⅱ 26は第 7 工区からの出土で、Ⅱ 17～Ⅱ 25は 6・7 地点から出土した縄文土器。Ⅱ 17は、隆帯と半截竹管状工具による施文の船元Ⅲ式だが、縄文は確認しづらく、深淺縄文であれば船元Ⅳ式になる。Ⅱ 18は中期末の深鉢胴部の帯縄文。Ⅱ 19～Ⅱ 23は縄文や沈線のある胴部破片である。Ⅱ 19・Ⅱ 20は縄文と沈線をもち、Ⅱ 21・Ⅱ 22は縄文のみで、Ⅱ 23は沈線のみである。いずれも中期末から後期中葉までの時期におさまる深鉢破片だろう。Ⅱ 24・Ⅱ 25は、ともに外面が撫で調整で、中期末から後期中葉までの時期におさまると思われる深鉢の底部ないし底部付近の大ぶりの破片。胎土は、Ⅱ 24は雲母が目立つのに対してⅡ 25は堆積岩粒が目立つ。

Ⅱ 26は、暗茶褐色土から出土した、器壁がやや厚くいくぶん内湾する 2 段撫での平安時代の土師器皿で、C₃ 類と思われる。

Ⅱ 27～Ⅱ 29は第 8 工区の黒灰色土からの出土。Ⅱ 27は器壁が薄く外反する 2 段撫での平安時代の土師器で、C₁ 類と思われる。Ⅱ 28は高台が外側に踏ん張る平安時代の須恵器壺の底部。Ⅱ 29は一枚造りと思われる、須恵器のような焼成の平瓦。平安時代後期の播磨産であろうか。

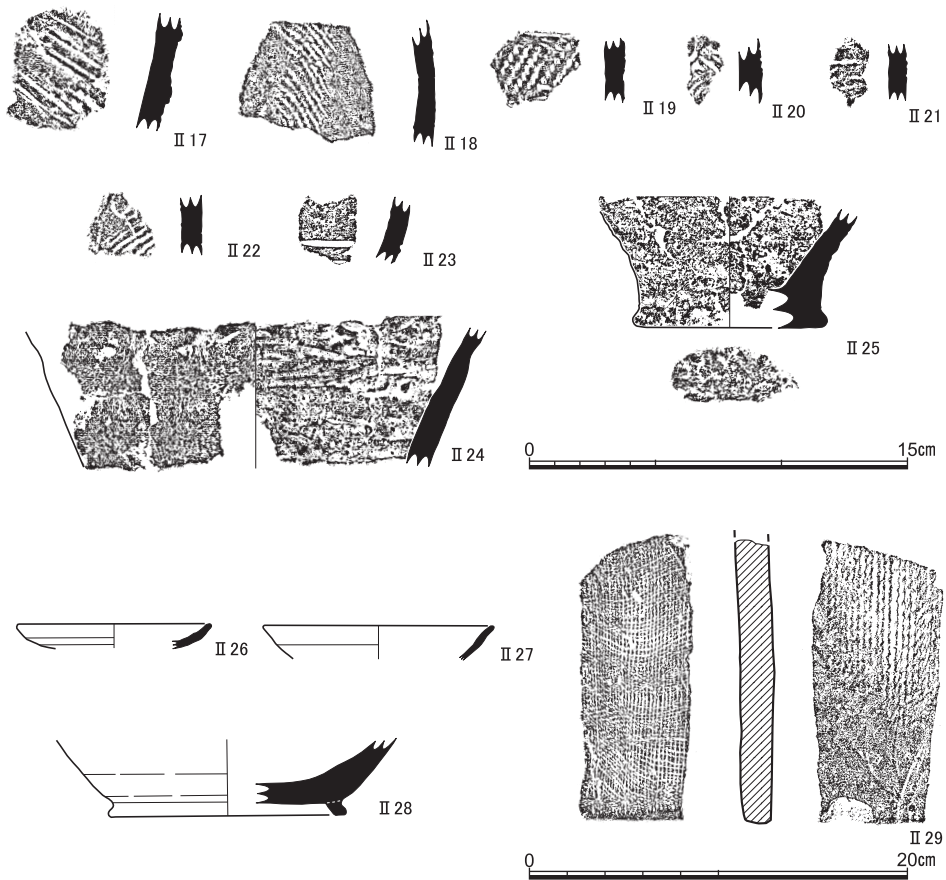


図33 第7・8工区の出土遺物 II 17～II 25縮尺1/3

3 1973年農学部総合館周辺発掘調査について

(1) 発掘の概要と層序 (図版7, 図34～36)

はじめに ここに紹介するのは、『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』(昭和48年9月)(以下、『概要』と略記する)として既報の発掘調査についてである。この『概要』は、残念ながら印刷物としてほとんど頒布されるものとなっておらず、また、とくに出土遺物については簡略な記述と少数の写真が添付されるにとどまり、資料として活用できる状態にはなかった。今回、至近の地点での立合調査を報告するに際して、この1973年調査資料の再検討もおこなったことから、前述の状況に鑑みて、出土遺物などを中

1973年農学部総合館周辺発掘調査について

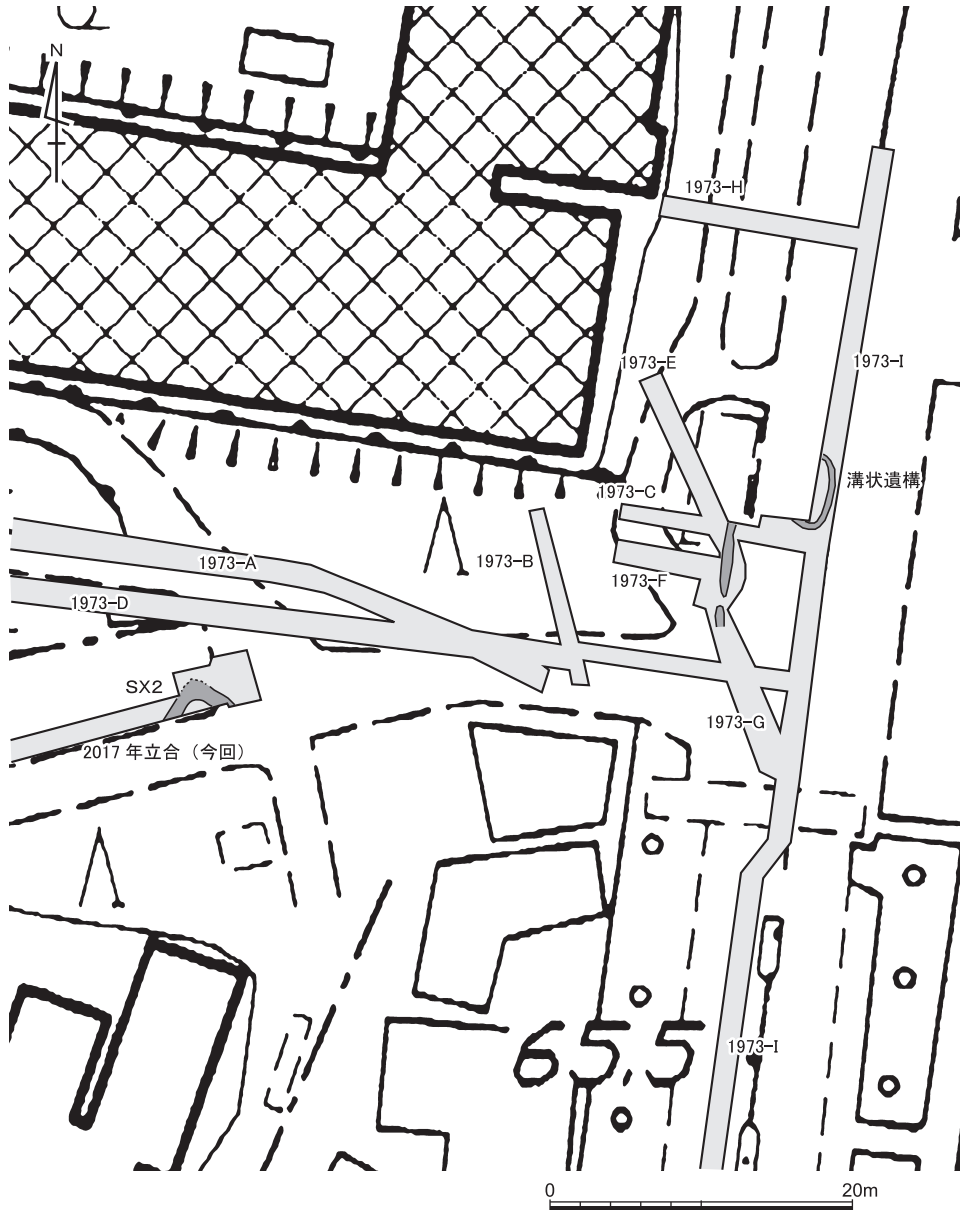


図34 1973年農学部総合館周辺調査トレンチ配置図 縮尺1/500

心にここに図示し、後世の活用をはかることとした。なお『概要』は、現在はPDFとして京都大学学術情報レポジトリKURENAIに収納され、誰でも閲覧が可能となっている (<http://hdl.handle.net/2433/151820>)。今回詳述しない経緯と経過をはじめ、当該調査の概要を把握することが可能であり、参照されたい。

トレンチの概要と層序 発掘調査は、管路敷設の1.5m幅の溝をそのまま調査トレンチとして活用する形で実施され、農学部総合館周辺のA~Hトレンチと、今出川通から北進して農学部正門を入り延びる、南北方向の長さ145mの長大なIトレンチの、計9つのトレンチからなる。『概要』の配置図をもとに、図34にこれらを示した。

このうち、互いに近接するFトレンチ北壁とBトレンチ東壁の層序については、『概要』に提示されているが、今回あらためてトレースして再掲した(図35)。これら2地点の層序はおおむね共通しており、とくに奈良時代層とされる黒色土層(第7層)が、黄色砂層上に厚く安定して認められる点に注意される。ただし、奈良時代に限定できるものではなく、それ以前の弥生中期~古墳時代の可能性もある点は、後述する。

また、Iトレンチについては、『概要』中に文章での記述のみであったが、今回、農学

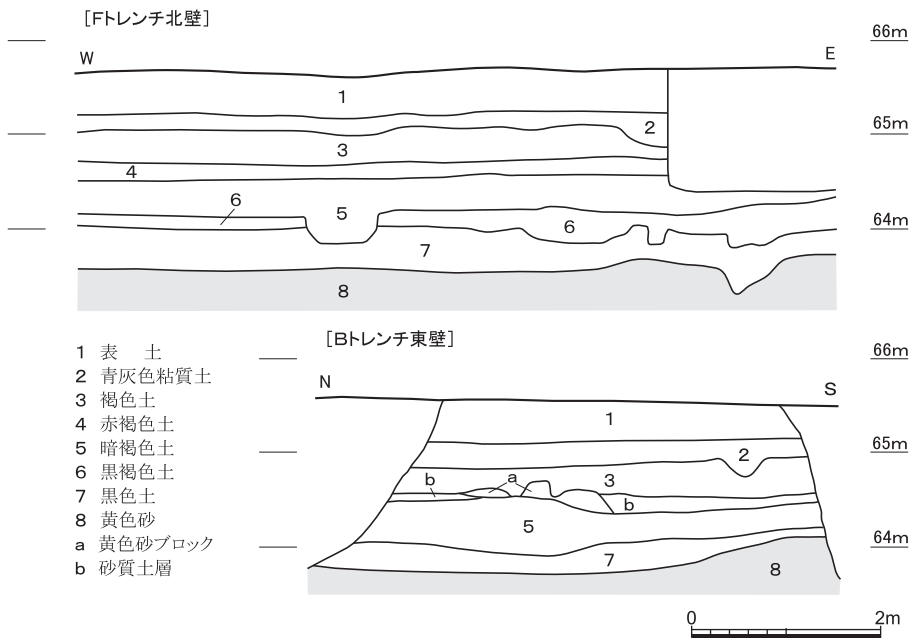


図35 Fトレンチ北壁・Bトレンチ東壁の層位 縮尺1/80

部正門以北についてを、調査時の原図をもとにトレースし、あらたに提示した（図36）。『概要』によれば、正門を境として南北で層序が大きく変化しており、南では、道路面下0.6～0.7mの水田床土層下部に約2mにおよぶ砂層の堆積がみられるのみで、遺構は全く存在しなかったとされる。門より北側では、層位は安定していくが、門北の約5m位にわたって層序の断絶が認められ、北側の古い白川砂層および歴史時代層が、南側の新しい白川砂層によって絶たれている、と報告されている。

図36には、その部分付近より北側の層位を提示した。ここにみるように、砂層どうしの切り合いは確認できるが、歴史時代層との関係については、肝心の部分が攪乱にかかっており、層位図からは関係を把握することは不可能であった。したがって、『概要』で推定するような、中世以降の新しい流れが西流していた、とする根拠は欠けていると言わざるをえない。今回の立合調査や、周辺での調査成果を勘案すると、中世以降の大規模な流れの存在は想定しがたく、その流下した時期は、少なくとも古墳時代以前ではないかと推測する。

農学部正門から約250m西南西に位置する276地点の発掘調査において、黄色砂層を切って西流する同じような流れの存在が確認されており、その流れは南側の217地点へもおよんでいる。上面では奈良時代以降の遺構が確認され、下面では、弥生中期後葉の土器が良好な状態で一括出土している。この状況を重視するならば、流れの時期も弥生中期後葉かそれに近い時期である、と絞ることもできよう。仮にこの流れが、農学部正門付近の流れが西へとおよんだものとするならば、その流れの上に位置する今回の立合調査第4工区の古墳時代遺構や、後二条天皇陵が古墳時代の産物であったとしても、矛盾しないであろうと考える。

(2) 遺構と遺物（図37～40、図版8・9）

溝状遺構と出土遺物 幅の狭いトレンチ調査であったため、遺構としてはIトレンチの方形にめぐる溝状遺構が、取り上げるべき唯一のものといえる（図34）。まずその遺構と出土遺物について詳述する。

『概要』によると、直上の黒色砂質土層が落ち込む形で、トレンチ西壁に入り込むコ字状に、幅50cm深さ20～30cm、南北辺5.5mで検出されている。埋土中から遺物がほとんど出土しない中で、南辺角近くに、完形の甕1個体がつぶれて発見された（図版7-3・4、図37）。トレンチを西へと拡張した結果、溝は西へ向かうにつれて北折し、結果として方形プランにはまともならなかったとされている。残されている図面でみる限りは、西北部分

京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査

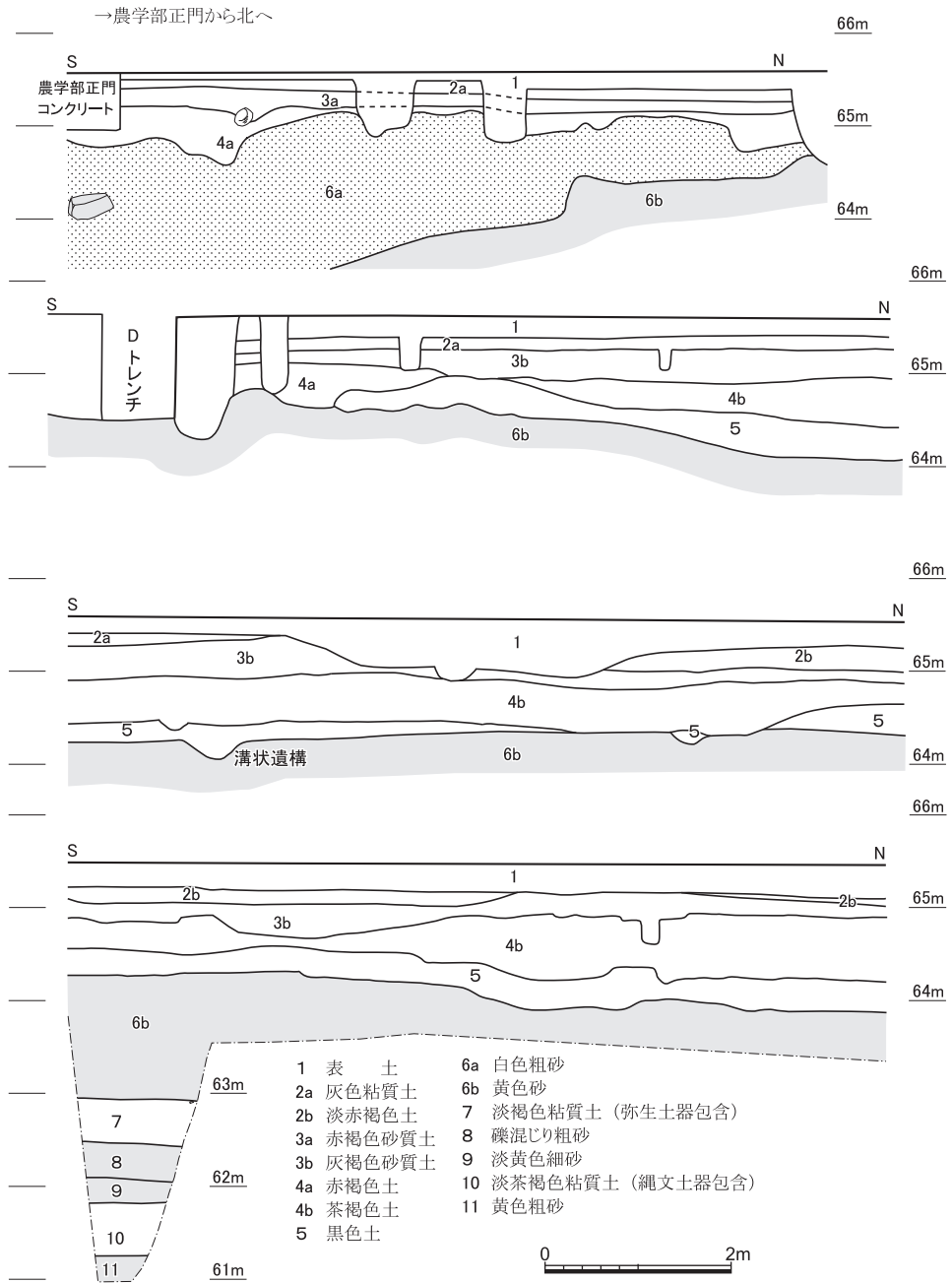


図36 Iトレンチ西壁の層位 (農学部正門より北側) 縮尺1/80

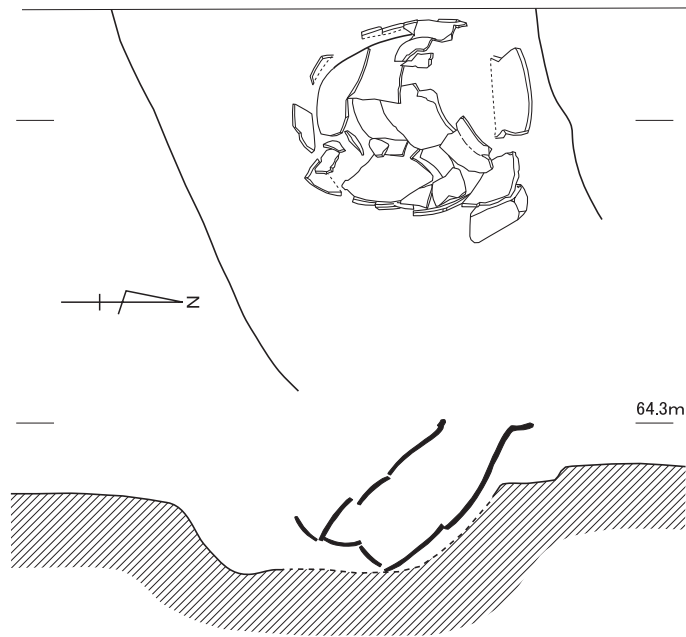


図37 I トレンチ溝状遺構内の甕の出土状況 縮尺1/10

は不詳ながら、南北軸が6mたらずの楕円形に近い形状であったといえる。

出土した完形の甕（図38-1）は、器高が40cm近くに達する長胴甕で、内外面の全面を刷毛目調整した後、外面下半は底部から中位まで削りあげている。口縁部は、弱く内湾する。この資料は、『概要』では奈良時代初期に比定され、黒色土を奈良時代とする根拠となっている。しかしながら現在の知見に照らすと、同種の特徴をもつ甕は、山城地域においては、京都市旭山古墳群・中臣遺跡などで知られており、7世紀中葉に比定されている〔小森1996〕。この資料の帰属時期も、その段階に求めるべきであろう。したがって、溝状遺構も、奈良時代ではなく飛鳥時代（古墳時代終末期）とするのが妥当である。

上記のように時期を推定すると、あらためてこの溝状遺構の性格が問題となる。形状からみて、住居社である可能性は低く、京都市旭山古墳群では、7世紀前半段階に小規模な方形墳の造墓をおこなっていることを考慮すると、墳墓の周溝であった可能性もあろう。とすると、出土した甕は、蔵骨器として使用されたか、供献されたものとみることになる。しかし、記録に残された出土状況によると、甕は、溝の方向と軸線を直交するような方向で、口縁部を溝で囲まれる側に向けて、溝底に接しながら出土している（図37）。仮に転落したものとしても、上記の用途に用いられたものとしては不自然であるともいえよう。

京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査

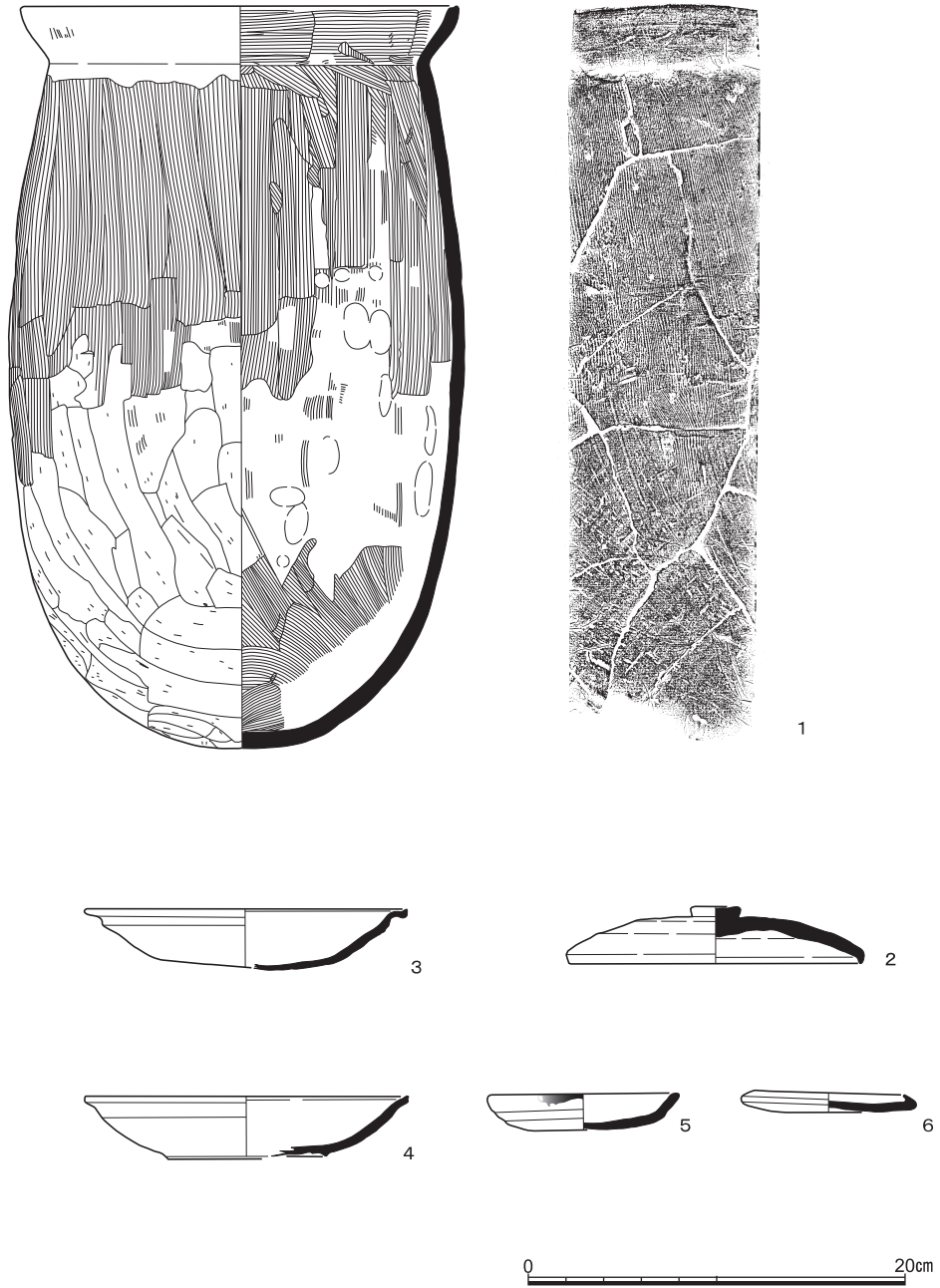


図38 1973年農学部総合館周辺調査の出土遺物(1)

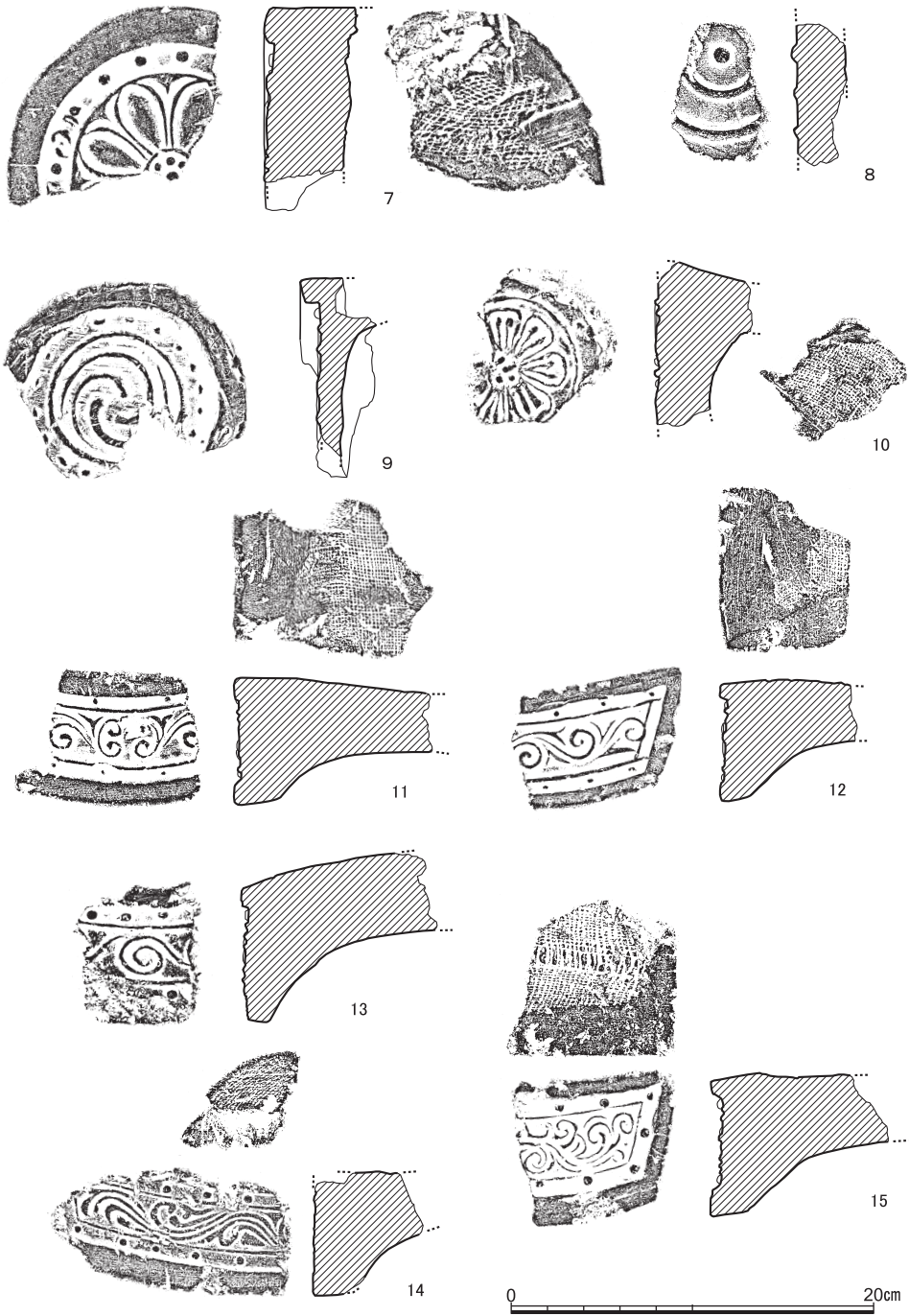


図39 1973年農学部総合館周辺調査の出土遺物(2)

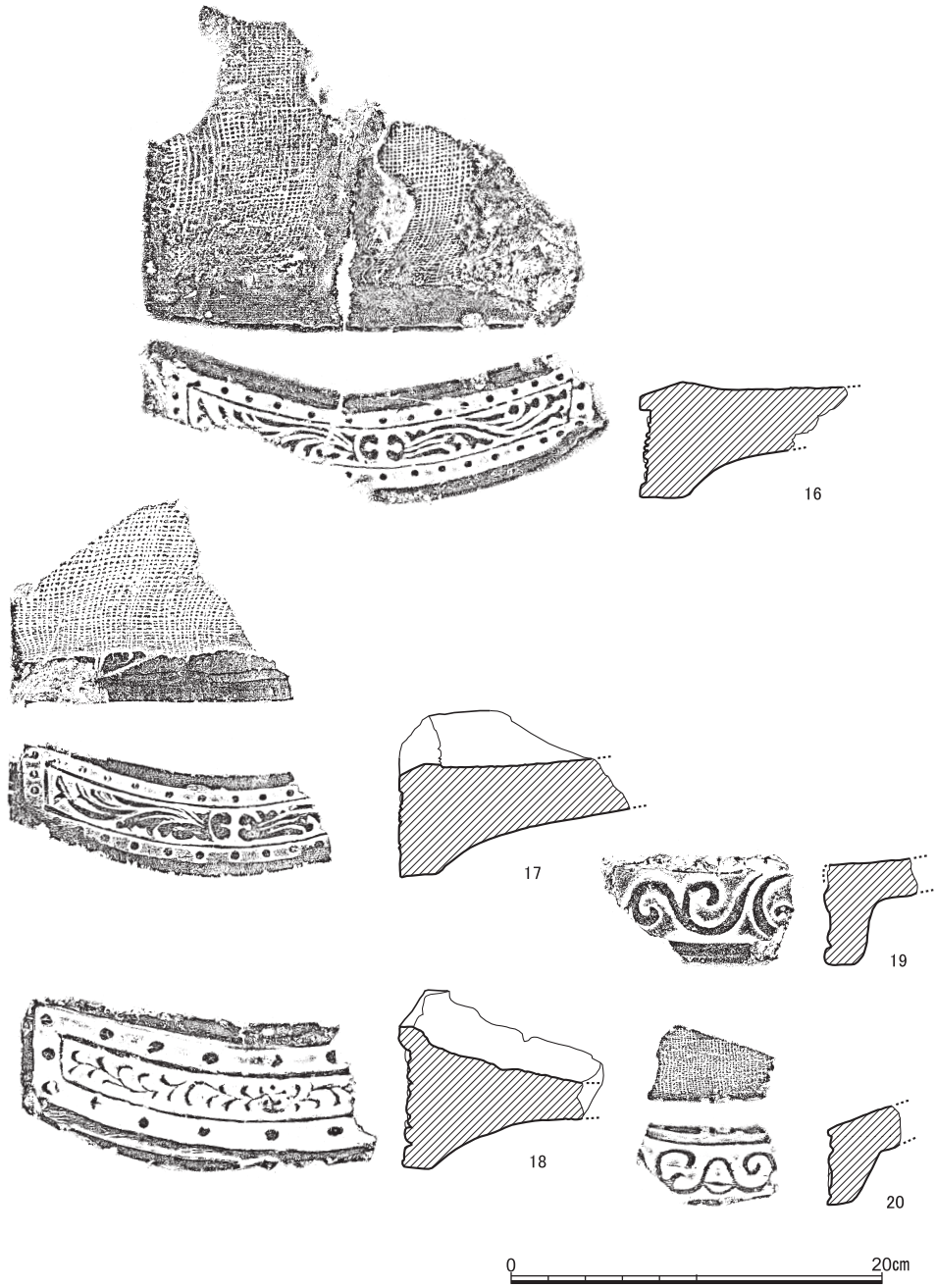


図40 1973年農学部総合館周辺調査の出土遺物(3)

小 結

土器と瓦磚類 遺構にはともなっていないが、おもにAトレンチやDトレンチを中心に、包含層中から土師器皿類と瓦磚類多数が延喜通宝とともに出土している。土師器皿類は、「て」字状口縁のものが多く（図38-3・4）、4には痕跡的な紐状の高台が付されている。9世紀末～10世紀初頭頃のものと言えよう。このほか、12世紀代のものと言える2段撫で手法の皿（5）や、受皿（6）がある。

軒瓦についても、土師器と同じく平安中期～後期のものがみられる。7は、瓦当に小野瓦屋産を示す「小」銘がみられるもので、軒平瓦の13と対をなすものとされる。また、18の均正唐草文軒平瓦は、平安宮大内裏に出土例があるとされるが、中心には「上」銘が認められる。16・17はC字対向の中心飾りをもつ同文の軒平瓦で、図示していないが、さらに2点の同文品が出土している。これら1973年に出土した軒瓦は、現在存在を把握しているものでは軒丸瓦が4点、軒平瓦が12点と、軒平瓦の比率がかなり高い。同様に平安中～後期の瓦磚類が多く出土している221地点でも、軒丸瓦16点に対して軒平瓦34点と、やはり同様な傾向が報告されている。そして、軒丸瓦では7と1点、軒平瓦では16・17との同文品4点が含まれている。遺構からの出土品ではないとは言え、組成の偏りは興味深いデータであろう。

(3) 小 結

以上、堆積状況の確認と出土遺物の提示を主眼にして、再報告をおこなってきた。奈良時代と報告されてきた甕が、古墳時代にさかのぼるものであって、出土した溝状遺構の性格について、墳墓を含めて再検討を必要とされること、平安時代中～後期の瓦磚類が多く出土しており、その組成比率の軒平瓦への偏りが、地点を違えても共通する可能性が指摘できること、の2点が、あらたな成果であったと考える。とくに、後者については、北部構内でも西半域では瓦磚類の出土は目立たないことから、瓦を使用したなんらかの施設を想定するならば、東半部の可能性が高いと考えるべきことが、いっそうはっきりしたものとみたい。

4 小 結

今回の調査の最大の成果は、第4工区における埴輪のまとまった出土である。調査形態や範囲の制約から、今回のSX1が古墳の周溝そのものであると確定するには至らなかったけれども、少なくとも至近に5世紀代の埴輪をとまなう古墳が存在することは確実にあった。吉田南構内における吉田二本松古墳群と同様な古墳群が、北白川追分町遺跡にも展

開していた可能性も、示唆していよう。埴輪の型式や特徴には、若干の相違がみられるようであるが、今後子細に検討することが課題となる。

また、埴輪の出土地点は、宮内庁の比定する後二条天皇陵の北側に隣接する。この御陵は、円墳状を呈している。こうした形状と、かつては「フケ塚」などと呼ばれ、周溝状の窪地をともなっていたと伝えられていること、また、京都市の遺跡地図上では、近接して追分町古墳群という横穴式石室の円墳が記録されていること、から、当該の御陵も古墳でもおかしくないとする推定も提出されてきた〔山田2005〕。今回の埴輪の発見により、中期古墳も含めた推定が可能になったとみることができよう。そして、前節で再報告したように、墓域としては終末期まで継続していた可能性も、示されたといえる。これらは、本部構内でみつかる同時期の遺構と一連のものかと捉ええるのかどうかを、今後検討していかなければならないだろう。

本章は、(1)・(2)を富井が、(3)・(4)を伊藤が執筆し、全体の調整を伊藤がおこなった。また、整理作業において埴輪について、梅本康広（向日市埋蔵文化財センター）、小浜成（大阪府教育庁）、阪口英毅（本学文学研究科）の3氏からご教示をいただいた。記して御礼申し上げます。